2024・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

53号
2024・1-2024・6

◉特集◉

上越なおえつ信金倶楽部講演会

感じ良い暮らしと社会

～公益人本主義経営への挑戦～

良品計画代表取締役会長 金井政明さん

◉特集◉

なおえつ うみまちアート 2023

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

直江津の冬 お正月の思い出

滝川鯉橋

もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる

なぜ〝御館(おたて)〟なのか

二人の関東管領と越後府中
―御館・守護所―

歴史は「今日」への手紙

直江津小唄にまつわること

直江津の冬、お正月の思い出

滝川鯉橋

あけましておめでとうございます。
直江津のお正月、今はどんな感じなのでしょう。

仕事がら私はもう三〇年近くお正月には帰省できていないので、直江津の冬、特にお正月の風景は子どもの頃の記憶が印象深く残っている。

私の実家は直江津駅前商店街を海の方へ歩くと見えた「能鷹」の看板をくぐったところの「来々軒」というラーメン屋で、冬の朝は雪かきをよくやらされた。一〇センチ位までの積雪ならまだしも、除雪車が出るほどの降り方だと店の前に雪が一メートル以上の壁のようになっている事もあってそういう時は途中までで勘弁してもらっていたかなあ。

暮れも近づくころには、前の道に雪のわだちが出来るようになり、通る自動車の前面にはミカンの付いたシメ飾り。角の「世界レコード」からは流行りの演歌や歌謡曲が聞こえてくる。商店街の歳末大売出しのアナウンスも流れていた。いつの年だったか「あったか、サー、バンバン！　ふれあい、サー、バンバン！」という明るく朗らかな女の人の声は今も耳に残っている。ありゃ誰だったのかねえ。叱言でよく言われた「あったかさ！」みたいだと面白がっていたものだ。

大晦日の晩飯はたいていすき焼きで、これが楽しみだった。ウチで牛肉を食べるなんて年に一回、この時だけだったような気がする。美味かったなあ。紅白を見終わると近所の真行寺さんに除夜の鐘を撞きに行く。今はどのようにしているかは分からないが、その頃は受付が本堂で、番号札のようなものをもらって順々に撞かせてもらった。けっこうな人数が並んでいたので鐘は百八より多く鳴っていたんじゃないかしら。その後は本堂へ上がらせてもらい、落雁と甘酒だったかお茶だったかを頂いた。いつの年だったかその本堂で見た地獄の絵が怖かった！　祖母と一緒だったので私が四、五歳の頃か。やせこけた人間がおっかない鬼に追いかけられたり火で焼かれたりしていたと思うが詳しくは覚えていない。すぐ目をつぶっちゃったのかもしれない。祖母に「うそこくと地獄に行くぞ、閻魔さんに舌ぬかれっぞ」と言われて震えたものだ。閻魔様は上の方に描いてあったんだろうけど、たぶん怖くて見ていない。何しろ怖かったことだけハッキリ覚えている。

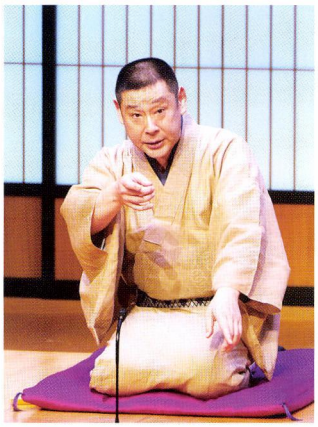
正月の楽しみに「三が日は即席ラーメンを食べて良い」というのがあった。自分ちの商売がラーメン屋だけに私は小学四・五年生くらいまでカップ麺を食べたことがなかった。テレビCMに影響されて私が「三が日だけでも食わしてくれ」と親に訴え、その願いが叶ったのがその頃だった。今にして思えば、ラーメン屋のセガレが妹たちと連れだって、嬉々としてナルスにカップ麺を買いに行っちゃイカンわ。でも、初めて食べたカップ麺の「どんぶりくん」、ありゃ美味かったねえ。

雪が積もっている夜、「あづま湯」さんへ行くのに父が引っ張るソリに乗っていくのも楽しみだった。時々わだちでバランスを崩してひっくり返っちゃっていたけれど。

店が忙しいとき、雪の降る中を御幸町の方への出前を頼まれて、そのウチの玄関が雪の階段状になっていて、そこで転んでオカモチを落としてしまい、泣いて帰ったこともあった。小五の頃だったかな。父にそれこそ「こーの、あったかさ！」と怒られた。まあしかしあれはイタイケな小学生に「五〇円やるすけ行ってこい」と言って出前をさせた親がわるいな、ウン。でも、ごめん。

中学三年の一年間はファミコンやレコードが買いたくて新聞配達をしていた。この年の冬は一斉雪下ろしがあり、その朝は中央商店街の道路一面が二メートル位の雪で埋まっていた。雁木のあるところは良かったが無いところでは雪中行軍隊みたいなもので、この時も転んで新聞は落っことすわ、学校には遅刻するわで大変だった。住吉町・福永町・天王町近辺の皆様、そのときの新聞が濡れていたり、届くのが遅かったりしたのは私のせいです、申し訳ありません。

えー、今も方々で七転八倒している私ですが、子ども時代を思い出し、初心に帰った気持ちになりました。何とか七転び八起き出来るよう、故郷に感謝し精進いたします。



高原隆（咄家・瀧川鯉橋）さん
昭和四六年生まれ、直江津南小、直江津中学校、直江津高校卒。
（公社）落語芸術協会所属。東京都台東区在住。

上越なおえつ信金倶楽部講演会　　令和５年９月13日

感じ良い暮らしと社会

～公益人本主義経営への挑戦～

㈱無印良品計画
代表取締役会長
金井政明さん



「幸せですか」

この質問をどこでもするのですが、ただ、「私たちは」と聞いたら、どうお答えになりますかね。「私たちは」をどの範囲まで入れますか、上越市あるいは日本、世界。もしくは「私たちの子どもは」「孫たちは」という質問に変えたらどうでしょうか。そう考えると違和感も含め、いろんな課題を感じています。まず簡単にそのあたりの我々の認識をお話したいと思います。

現代は過剰な資本主義

グローバル経済と言いながら、企業も人も、国まで過剰な資本主義に巻き込まれてしまっています。そこからなかなか降りられない。そんな構造なので貿易も物ではなく、お金なんですよね。これが投機マネーになって世界中を回り、お金が無いところには無い。渋沢栄一先生にあの世から「君たちは『論語』をお忘れか」と言われるような社会になってしまい、むしろ、資本主義のデメリットの方が多くなっています。

気候もそうですよね。一〇年に一度、一〇〇年に一度なんて、もう言っていられないようになってきました。

各国は、一生懸命経済の回し車が自分の国に有利になるように外交を行っています。企業も同質化競争や人口減少の中で、パーパス―企業が果たすべき使命―なんて言っていられなくなって、今日明日の売り上げばかり気になってしまい、人々はどんどん個人主義に傾き、汗をかくことを嫌う。先ほど理事長さんとお話していましたが、そういう意味では信金さんの出番だと。

国は税金で得たお金で票に繋がるようなサービスを提

供し、我々国民は「もっともっと」と言い、足りなければ孫の代の分まで使ってしまっているのが現代のような気がします。そんなことがなぜ起きるのかというと、人間が「自己家畜化現象」に陥ってしまっているからなんです。人間はいろんな動物を家畜化してきました。家畜化するということは本来、動物が持っている能力の中で、人間にとって有益な能力は伸ばし、必要のない能力を退化させることです。したがって家畜の豚は早く太るようになりましたが、山に放しても生きていけない。これが家畜化で、実は人間は自分たちで今の社会経済の仕組み、特に戦後の経済社会の仕組みに合致するように子どもの頃から学校で教育され、大人になっても会社で教育され、本来持っていた人間の皮膚感覚や感情が退化してしまっているのではという議論を、今、私たちはしています。

七〇年ぐらい前の日本の子どもたちの写真（スクリーンに写真）があります。大きい店舗では巡回展「写真家が捉えた昭和の子ども」で展示したのですが、被写体になっている方たちは今、七五歳から八五歳ぐらいになられていると思います。写真のわらじを履いて石像を運んでいる人は新潟県の方です（写真は浜谷浩撮影／桑取谷・地蔵様年始）。これらの写真を見ながらみんなと議論すると、「なんか謙虚ですね」とか「素直で我慢強くて助け合っていて、子どもたちは良い目をしてますよね」という話になるんです。当時の経済力がどのくらいかというと、GDPは八兆六〇〇〇億でした。現在は五〇〇兆円ぐらいですね。経済は大きく伸びたわけです。先の写真の時代の子どもたちは、とても働きましたよね。私たちはどうかと言うと、「傲慢になっちゃったね」「人のせいにして個人主義になり、これだけの経済力があっても、みんな将来に不安を持っている」ということが議論になってくる。


講演する金井会長

最近、話題のAIも含めたデジタル社会にどう対応しようかという話もしています。例えば、約七年前の中国で大量の自転車が廃棄されている写真を見た方もあるかと思います。七、八年前、デジタル化が進んでいる中国ではスマホを使ったシェアサイクル事業に多くのベンチャーが参入しました。これは自転車をどこで借りてもどこで返してもいい。自転車に問題があれば、通告するとポイントがもらえるという素晴らしい仕組みで、最初は採算に合わない値段でスタートし、まずシェアを取ってしまおうとしました。ところがこの時、六〇社を超えるベンチャー企業が一斉に参加したため、資本の論理で潰れていったわけです。そうすると、倒産したので自転車を片付ける人がいない。中国駐在のうちの社員は、未

だに保証金が返って来ていないそうです。まあ、そうなりますよね。

デジタルに短絡的に資本の論理を使うと、社会がおかしくなると思っているんです。例えばいろんなペイメントがありますが、大きな資本力で圧倒的に割引のサービスをし、テレビコマーシャルをして、お客さんの数を増やして、ナンバーワンになると、だんだん課金をしていくわけですね。一般的なスーパーマーケットは一生懸命安く販売したいと頑張っていらっしゃるので利益が二、三%です。そこに、この決済手数料で二%を取られたら何にもならないですよ。北欧やインド、中国では、国がデジタルの仕組みやインフラを作ってみんなに解放するんです。でも我々の国は資本の論理として民間に任せるからこういうことが起きるのです。

あるいはサブスク（サブスクリプション＝定額定期購入）。我々の家族も若い人もみんな使っていますし、悪くはないのですが、こんなものに没頭していていいのかという話もある。

実はデジタルというのはまさに経済戦争なんですね。でも、多くの若者はそんなことを気にせずにこの外国のビジネス戦略に乗せられて、携帯で注文してご飯が届くとか、音楽も映画も見放題でこの値段とか、まあ受動的な快楽だと思うんですけど、そんなことに溺れているのが今の日本。それじゃあ負けるでしょ、という気がします。

いろんな企業　デジタルトランスフォーメーション（DX＝デジタルによる改革）と言って効率化を行いますが、そのほとんどがクラウド（クラウドコンピューティング＝インターネットでソフトウエアのライセンスなどを購入できるシステム）を使います。クラウドのお金は大半がアメリカに流れるんです。ちょっと怖いですよね。

たとえばこれらのアイドルの写真（スクリーンに数人のアイドルの顔写真）は、実際の人間ではなくてＡＩが生成したアイドルです。こんなことはいとも簡単です。あるいは景色のイメージを作って「春の景色」と言うと、ＡＩが春の写真を生成します。これもいとも簡単にできます。アメリカの大統領選で、トランプさんの支持層は労働者階級の白人ですが、彼の選挙活動の映像や画像には必ず有色人種が写る割合が多い。これはメディアがどこを切り取るかで全く違う情報が伝わるという事例です。

インターネットが出た時は、これで自由に世界中と会話できるなんて話はありましたけど、実際にはお金や権力でコントロールされています。ウクライナの戦争での両国のプロパガンダを見ると、信じるに足らないこともあることが分かりますが、これから私たちは「本当に正しく情報を整理できるんだろうか」という時代になると思います。ですからデジタルというテクノロジーを私たちの社会や暮らしにどう入れるかという見識を持たないといけないと思います。

世界の人口はまだまだ増えます。そして、こんな気候ですから食べ物は奪い合いになります。日本は買い負ける国になります。そして人口は約半分になります。世界中のメディアでは日本はどうなっちゃうんだろうという論調が多いですね。インドの人口は一四億人と言いますが二二億人ぐらいまで伸びます。中国は一四億人と言っていますけれど、ここは半減します。

無印良品の誕生

そのような過剰な消費社会へのアンチテーゼということで、無印良品は生まれたのですが、人間という生き物は、

とても欲張りな生き物で、他人の目をとても気にするんです。見栄を張ってみたり、自慢してみたり、あるいは嫉妬してみたり。こういう生き物にとってこの過剰な消費社会は肥沃な土壌なんですね。

一八世紀後半、ヨーロッパで産業革命が起き、資本主義が成立します。そうすると貧富の格差がひどくなり、スラム街が生まれ、そこから伝染病が発生する…。でもそのなかでモダンデザインによる都市計画を立てたり、田園都市を作ったりしたのは建築家です。「多くの人が快適に暮らせる」ことで民主化しようとしたのがモダンデザインです。ところが一九三〇年ぐらいにアメリカ人は、このモダンデザインを売り上げを上げる道具に変えました。例えば私が、車を買って三年目で初めての車検に出したんです。すると車屋さんが「来月、新しいモデルが発表になります」って言うんです。私は、あまり乗らないので必要ないんですけど、どんなふうに変わったのか見ると、テールランプがつながっただけでした。そういう商売ですよね。

ファッションにおいても、ファストファッション（流行の最先端をいち早く取り入れ、低価格で適度な品質のファッション）に対する批判もありましたが、デザインは「去年のものをいかに古く見せるか」に使われてきたんですね。それが先ほどの環境問題や格差、食料、エネルギーなど、色々なところに影響してきた。結局、こういう過剰な消費社会は、お客さんのニーズや欲求を満たさないんです。満たすと売れなくなってしまうからです。満たさないで常に目先を変えていくわけです。気を緩めると無印良品でも売ろうと思って同じような罠にはまることがあります。現代社会はこの過剰な消費社会が弊害になっているのではなかろうかと思っています。

望ましい消費社会へ

イギリスの経済学者、シューマッハー（エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハー）は、「ヨーロッパ人が作った資本主義は間違っているところがある。そもそも自然資本を資本ではなくて所得と考えた」と。俺が掘った石炭＝所得、俺が掘った石油＝所得。自然資本を「俺の所得」と考えたから間違ったと。もう一つは全てをお金に換算して考える社会を作ってしまった、と彼は言うんです。五〇年前にすでに言っています。

「ご飯をどう食べるか」について、次のような分類で考えてみます。（人類の地平から―生きること死ぬこと―川田順三）

- モデルA　神から創られた人間が繁栄するために自然や動物が創られた。
- モデルB　自然の中で人も動植物も生かされている。
- モデルC　「自然」の概念もなく、動植物もみな同様に主体性を持つ。食べ物も採取ではなく交換の精神。

私たちはBです。

モデルAの人は、できるだけ道具を作るんです。道具を作ることは文明としては発達しますが、料理を作るだけでも道具をたくさん使うことになります。人間が繁栄するために自然や動物が作られている。だから、多くを利用して繁栄しなさいというのが根っこにある。

モデルBの日本人は、箸とか包丁など少ない道具でなんでもやるんです。だから「道具の人間化」。銀座の一流の寿司店に行くと「包丁が俺の手なんだ」というぐらい、道具が人間化しています。そして、我々は自然の中で人も動植物も生かされている。だから神は山にもいるし海

にもいるし、どこにでもいるという基本的な根っこを持っています。

モデルCは、先住民と言われる人々ですが、もう自然なんて概念すらない。動物も植物もみんな主体性を持って、魂を持っていて対等なんです。食べたりすることは交換なんです。

いろんな考え方があるのに、モデルAの価値観が世界に広がることをグローバル化と称していて、その軋轢が今まさに起きているわけです。私たちはモデルCも含めた多様な文明をもう一回再認識するようなことが必要だと思いつつあります。

四月の一五、一六日に札幌で、G7世界のエネルギー・環境相会議が開かれ、会議に合わせて「環境広場ほっかいどう」という関連イベントが開かれました。SDGsや環境にいいことをしている企業を紹介するブースを作り、「日本もこんなに頑張ってます」「我が社はSDGsでこういう取り組みをやってます」と、中には空飛ぶ車とか、水素エネルギーなどを紹介するブースなどが、たくさん並んでいました。その最後に、北の国からの倉本聰さんが主宰するNPO法人が「文明の墓場」というタイトルのブースを作ったんです。その倉本聰さんのブースへの思いを伝えた新聞記事がとても良かったのでご紹介します。

そのブースは、中へ入っていくと黒と白の幕が張られていて、お線香が焚かれている。みんなが捨てた服や家具、携帯電話などが山になっている。もう少し奥に入ってくと福島の原発の映像やタンクが満杯になっている写真。そういう光景の中を歩いていくと、突然、サイレンが鳴って、その音にビクッとするんですけれど、それは放射線が一定量を超えた時に鳴らすサイレンらしいんです。そんなところを通り過ぎていくと綺麗な森の写真や映像になり、一方で都会の映像が流れていて、「皆さんは文明に麻痺していませんか、東京では電気を作っていませんから、搾取的なエネルギーを使って現代を謳歌していませんか」というメッセージが英語で流れ、日本語のキャプションもあるんですって。

かっこいいなと思って紹介をしました。

人間が幸福になる消費

やはり「私たちの生活はどうあるべきか」というところまで踏み込まないと、問題は解決しないんだろうなと思います。

今まで豊かさや幸福というのは、GDPの大きさが基準でしたが、そうではなくて「消費は人間が幸福を得る一手段にすぎず、最小限の消費で最大限の幸福を得ることである」という、五〇年前にシューマッハーが言った言葉に今の世界の若者たちは賛同するんです。「金井会長は逃げ切れる世代だ」と、先日対話した若者は言うんです。「いいですね、好き勝手やって逃げ切れる。でも、私たちはこれから先、何が起きるかわからない。そんな私たちが子どもは産めない。そんな無責任なことをできるか」と言うんですよ。自分の未来もわかんないのにと…。

そのような中で私たちが考える望ましい消費社会とは、必要以上に物や文明に依存することはやめて、もっと自分らしく、自分の思いから自分の生活を楽しんで、文化的水準の高い暮らしができるような社会、こんなふうに私は考えたいんです。

先日のことですが、我々はお客様に対して、

今、生きる人々、多様な人々を尊重して、お客様が自分の思いで自分の生活が編集できるように、素材と言えるぐらいの商品、お客様の自由になる商品を提供する。

ということをもう一度、社員のみんなと共有しました。そして、これだけ地球が困っているので、ゴミと言われているもの、例えばもみ殻なども役に立つ資源にしていくような活動、研究をどんどん進めようと思っています。

あまり外では言っていないので、知られていないんですけど、無印良品が生まれた時、マーケティング・コンセプト（素の自分に戻った人々へのマーケティング）ということを誰もやっていなかったんです。

例えば、「子どもを塾に行かせるのは可哀想だけど、周りのみんながそうしてるんだ、かわいそうだけど行かせている」と言う人がいます。でも、その送り迎えがベンツなんですよ。きっと親心なのだと思いますが、あっちの家がベンツ、こっちの家がクラウンで来るみたいな、そんなふうに、今の社会や経済に生活を合わせて生きている自分たちがいるんです。

ところが家に帰って本当の自分に戻った時、ほっとしたい時、そういう意図的なデザインやゴージャスさに安心できるかというと、そういうことではなく、実は解放されたいんです。ほっとしたいんです。自分が中心でいたいんです。

そこにマーケティングしたのは無印良品だけなんです。それをもっともっと磨いていきたいと思っています。ですから「あるがまま」「無垢」そういうことが多分、無印良品の特徴なんでしょうね。売ろう、売ろうとすることを考えない物というのが、作為性が消えて匿名性という表情を持てるんです。やはり、ここまでやらなきゃいかんっていうのが今の認識です。

公益人本主義

我々は「役に立つ」という大戦略を持ち、次のような七つのことを考えています。

一、傷ついた地球の再生
二、多様な文明の再認識
三、快適・便利追求の再考
四、新品のツルツル・ピカピカでない美意識の復興
五、つながりの再構築
六、よく食べ、眠り、歩き、掃く人間生活の回復
七、OKAGESAMA　OTAGAISAMA OTSUKARESAMA（おかげさま　おたがいさま　おつかれさま）を世界語として発信

一番から四番までは四〇余年前の創業時に書いていたものです。結構、早いんですね、この辺の感覚は。五、六、七は一〇年ちょっと前ぐらいから考えてきたものです。「つながりの再構築」とか、日本にあった、「いや、おかげさまで」とか「困った時はお互い様だよ」ということを、もう一度、思い出してみんなで使いましょうみたいなことです。そして公益人本主義という経営をやりたいと話しています。

公益人本主義＝良品計画は、社会にとっての公益に貢献する事業活動を通じて営利を生み出すことで、公益と営利を持続可能な形で両立させることができる企業体でありたい考えています。そのような理想を掲げる当社にとって最大の資本は「人財」です。社員が「社会や人の役に立つ」という理念や、自らの夢の実現に

対する情熱と志を持って、地域や店舗で主体的に考え、自律的、自発的に行動することを大切にしています。当社が目指すこのような経営のあり方を「公益人本主義経営」と定義し、その実践を担う人財の育成と組織づくりこそが当社の経営戦略の根幹であると考えています。（良品計画の経営方針より）

公益なので当然、営利の企業と社会の公益性の両方やれる事業モデルをと考えています。ですが、そのための資源はやはり人ですよね。だから古谷（ふるたに）さん（無印良品直江津コミュニティーマネージャー）みたいに社員が皆さんと一緒になって汗をかくような会社にしたい。そのために社員みんなが会社の株の二、三割を持てるようにしたいんです。これにはいろんなハードルがあり簡単ではありませんが制度を含め挑戦していきたいです。古谷さんは株主なんです。そして直江津の店の経営者であり、皆さんと協業するプレイヤーで、ワーカーじゃないんです。そういう人をたくさん作っていきたいのです。

そして「二つの使命」を持ち、人間は生きている以上、靴下も必要だし下着やタオルも必要です。そういう物については使えば使うほど社会を良くするような商品にしていきたい。そして各店舗は地域に巻き込まれ、地域の課題に対して地域の人と一緒になって汗をかく。そういう使命を持ち、そぎ落とした素材としての商品を「売り付ける、押し付ける」ことをしないで、手渡したいと考えています。そして無印良品の商品の周辺、店舗の周辺で我々が「超小売り」と呼んでいるような、様々な課題に対する取り組みを地域の方と一緒に進めていく会社にしたいと思っています。

つながりの再構築と無印良品の取り組み

そういうことで家も作りますし、団地の再生もやっています。団地の中には小さい店を出して交流できるようなイベントをやったりもします。成田空港の第三ターミナルの空間デザインなどもやりましたし、今はホテルを三つ展開し、最近では古民家を皆さんが泊まれるような施設にする事業も始めています。

もう八年ぐらい前からになりますが、高齢化で維持する人がいなくなった棚田を維持する活動をしています。その棚田へは都心からお客さんが行って、田植えや草取り、稲刈りをする。棚田の一番上には棚田オフィスというのを作って、実際に辞令も出して。「行き先、棚田オフィス」（笑）。言われた方はびっくりしていました。

全国の道の駅は七割が赤字なんです。そういう道の駅の運営委託を受けて運営や経営もしています。あるいは廃校の小学校の校庭に無印良品が作った小屋を二〇個ぐらい置き、週末、東京からここに来て小さな菜園で野菜を作ったり、魚や野菜も売ったりしています。

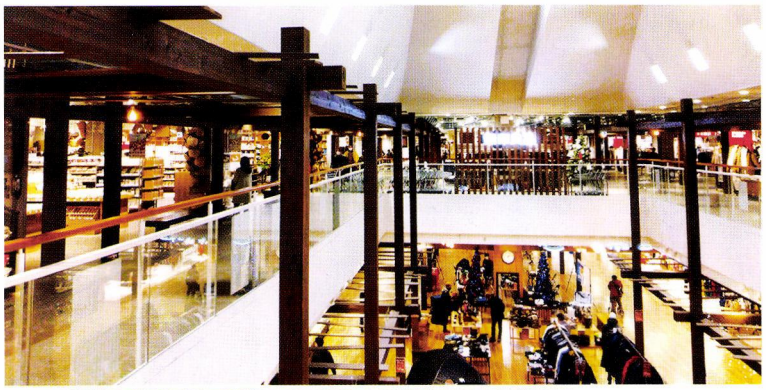
そんな中で直江津にも大きい店を出させていただきました。開店当時、世界で一番大きい無印良品でした。SNSでは「なんで直江津に世界で一番でかい店を置くんだ、ロジックわかりません」なんていうのもいっぱい書かれましたね。「俺、ロジックで動いてないから」っていうぐらいのことなんですけど（笑）。

頸城自動車さんにも協力していただいて移動販売のバスを動かして。こんな写真を見ると、感動しちゃいますよね。このバスは佐渡にも行ってます。これは山形の写真ですが、おばあちゃんが無印良品の紙袋を持ってくれています。いい景色だなってすごく思います。

先ほども申しました通り、日本の人口はどんどん減っていき、二〇五〇年には高齢化率が四割、子どもは今一四・六%だったのが九%になる。こういう社会に向かうんですよね。ですが、たとえ人口が半分くらいになっても、そこでみんなが感じよく暮らせるような社会を作っていくのが、まさに信金さんの役割だなという話をさっき、理事長や信金倶楽部の小林さんと話していました。

それはどういう社会かというと、経済と環境と文化がバランスよく支え合う社会だろうと思っています。その社会に皆さんが産業や医療、あるいは教育をお作りになる時に、私たちは少しでもお手伝いしたいと考えています。行政の皆さんと民間（企業）、市民の皆さんが競争ではなくて、共生する社会をどう作るか。日本はよく生産性が低いと言われるんですが、あまりにも同質化競争が多すぎるんですよね。ですから、ここは考えていかないといけないですね。

これはアメリカの例ですが、GDPが一定水準を超えると幸福度は下がってくるんですね。アメリカで一番幸福度が高かったのは一九五〇年代。ですが一定水準を超えると、欲しいものはたくさん見せられるけれど買えないという人が増えて、幸福度は下がるんです。ですが、同じ収入でも社会的共通資本が整っている国は幸福度が高いのです。それは介護保険で通院入院できたり、質の高い教育が受けられる公立の学校があったり、公園がき







上　エルマール SC に国内最大級の無印良品直江津
中　三八朝市に出店
下　MUJI バスが小木港へ

ちんと整備されていたり、美術館があるとか、そういうことですね。

外面満足価値と内面満足価値という視点に立つと、先ほど申しました子どもの鼻が高くなるようにベンツに乗るのは外面満足価値です。あるいは高層マンションの最上階の部屋は夜景が綺麗だという理由で二億円で買うのも外面満足価値です。でも、これは慣れたら普通になっちゃうんです。そうではなくて内面満足価値、例えば家族と仲が良くて助け合っていたり、あるいは会社や行政が同じ課題や目標に向かって一緒に汗を流して、夜、仲間で飲んだり。こういうことが幸せだと思います。

一昨年の「うみまちアート」の時に台風が来て、みんなで協力して寝ないで波打ち際の「そらのみなと」を守ったような、そういうことで結束が高まって一層お付き合いが深まる。こういうことで幸福度が高くなります。それは経済学者や社会学者も実証しています。

ですから、人々が元気で希望を持って、地域に参画して共生する社会というのは、どうやって作ったらいいでしょうかとみんなで相談したり、皆さんが自分ごととして、お互いの事情が分かるような距離感や規模感の中で共生協業する経済環境、そのような文化ってどんなことだろうと考えることがとても大切だと思います。



そらのみなと
第１回　直江津うみまちアート

例えば、「やさいバス」というのを考えた女性がいます。今、その方にはうちの会社の社外取締役になっていただいていますが、農家さんが高齢化して、作った野菜を農協などに持ってくのが大変なので、野菜が採れたら玄関前に置いておいてもらう。それを「やさいバス」が回収して、農協や市場ではなく、直接、料理屋さんやスーパーに持っていくんです。そうすると色々な商流でマージンを落とさなくてよく、農家さんの収入が増えるんです。そういう、いろんなことをやっている人とつながっていくことが大事だと思います。

行政的に言えば、財政的にも限りがある中で、みんなが当事者になるのは、どんな時かなと考えた時に浮かんだアイデアがあります。例えば私は夜、散歩しながら嫁さんと銀杏を拾うんですよ。誰も拾わないんだもん。他にも民家の庭先に、たわわに実っていながら一つも収穫されないみかんの木があったりする。そういったものを地域の皆さんで、例えばジャムにしたりとか、無駄にしない取り組みができないかなと思ったり。

あるいはフィンランドやデンマークでは自分の家のいらないものを持ち寄って好きに売る、クリーニングデーというのが月一回あって、値段は自由、入場料を五〇〇円だけ取るんです。そういうのはお金がかからないんで、店舗で開催できないだろうか。他にも現在、家庭では作らなくなった地域のソウルフードを店舗で地元のおばあちゃんに教えてもらい、皆で作って食べてみたり。

「食と農」を地域でどうやって回すか考えると、あまり化学肥料や農薬に頼らず、小さな規模で良いものをちゃんと作っている人と協業しながら、やさいバスみたいな仕組みがいいのかな、とか。まだ研究段階ですが冷凍技術はとても進んでいるんです。野菜はとれる時はいっぱいとれるんですよ。それは同時に値段が下がるんです。これが農家にとって厳しいんですね。ところが0度で保管したら六カ月は持つんです。そういうことを進めて、農家さんが昔から余儀なくされてきた苦労を減らすことをみんなで考えたり。そういうことを研究している会社と一緒になって苦労を減らして収益、利益を上げてく。そして我々がちょっと出口として協力できることをやる。



まちの保健室　ウォール薬局（無印良品直江津）

また、何より健康がなかったらどうしようもないですよね。だから未病や予防のための「まちの保健室」を立ち上げています。直江津でも地域の医療センターや介護士の方に協力してもらいながらやっています。お医者さんでは処方してくれない社会的処方というのがあるんです。それはみんなでラジオ体操をやったり、歩いたり、ゲームやったりということですね。そういうことは私たちでもできるので、そういう未病、予防のデータを使って病院とつなげていく。そのなかで、病院の内装デザインを見直そうという試みも始めています。

それから地域の皆さんの小さくても固有の経済活動を応援しています。趣味でクッキーを作っていたら、みんなに美味しいって言われて、ちょっと売ってみたくなったら、直江津の無印良品へどうぞと。これを日本全国でやっていますし、世界の無印良品でも行っています。そんなことでどんどん人と人がつながっていけばいいと思っています。

先日は千葉県の築一〇〇年の空き家をリノベーションして宿泊施設を作りました。今後、周辺に体験や食事、観光、セラピーや医療施設のようなものを作っていくことで、インバウンドも含めて役に立てればと思ってます。

徳島県の上勝町はゼロ・ウェイスト（＝無駄・浪費・ゴミを無くす）で有名な町です。町民がゼロ・ウェイストセンターへごみを直接持ち込み、一三種類・四五分別し、償却・埋め立てからゴミを救済し資源化することで、処理費用の削減を図っているのですが、ゴミを出さないとした時に、やはりみんなの協力が必要なんです。今までずっと自分のことだけ考えて、俺は税金払ってんだから行政がやればいいじゃないかって言ってきた社会ですけれど、そんなことでは、社会はもう持たない。電力も同じです。だから今、すぐにはできませんが、私たちは日本でソーラーパネル、蓄電池を作ってる人たちと話をしながら、これらを広げてく準備をしています。そうしないとほとんどが外国製になってしまう。それは地政学的リスクも大きいですね。

直江津でも開催している「いつもののもしも」という防災の取り組みもあります。地元の消防署や警察署をはじめとした行政や、商店、地域の皆さん、みんなで作り上げています。他にも、文化やアートのある暮らし－ライフインアートの一つ「なおえつうみまちアート」はすでに三回目ですよね。二回目からは地元の方たちが中心になってやっていただいていて、なんかいいなと思いました。

感じ良い暮らし

今までお話してきたように、「暮らしに大切なこと」という一〇の項目を立てて、地域の皆さんと「うちはこれが足りないな」というような点検をしながら、みんなで取り組んでいきたいと思っています。

一、自分の資質を活かせる仕事や趣味
二、地域の伝統や生活文化とダイバーシティ（多様性）
三、地域の安全な食とエネルギー
四、便利な公共交通と車の入らない街路や路地
五、高度な医療と介護の体制
六、社会教育の意識と学校教育
七、四季の風景ときれいな水と空気
八、なじみの店やなじみの仲間
九、好きな本、音楽、映画、アート
十、「お互い様」「おかげ様」と言い合える人間関係







いつもののもしも CARAVAN

コロナでだいぶなくなっちゃったんですけど、なじみの店って必要ですよね。復活できるところはしてほしいなと思います。

日本を元気にして未来に繋げる活動は中央ではなかなかできなくて。一方で、各地域での小さい活動は結構あるんです。それを私たちはローカルヒーローと呼ぶんですが、そういう人たちが全国にたくさんいることが分かっているので、その方々をうまくつないで、補強して、面にしていくのが私たちの仕事なんだ、使命なんだと思い



３回目のなおえつうみまちアート

――会を代表いたしまして代表幹事の小林よりお礼の言葉がございます。

本日は大変、貴重なお話を いただきまして誠にありがとうございました。お忙しいところ、遠く直江津まで来ていただいて、本当に感謝しております。ショッピングセンターに出店を決断していただいて本当に良かったなと思っております。

無印良品さんのことは三〇年も前から、東京に行った時とか、新潟にいったときとか、各駅の店舗に出店されたりして、比較的小さな店舗ですけど、見に行き来して、利用もさせていただきましたが、今日は、その真髄の考え方と言いますか、企業の思想の一端のお話うかがって本当に良かったと思います。

まだ消化しきれないものがたくさん 頭の中に残っています。また、古谷さんがそれを私に教えてくれると思いますので、教え子の古谷さんとお付き合いをさせていただいて、地域と共に発展できたらと思っております。今日は本当にありがとうございました

ながらやっています。

幸せっていうのは、こうやって他の人の役に立てているという実感を持ちながら、お互い様という社会をみんなで作っていく、そんな仲間がいることだと思うので、古谷さんは幸せ者だなと思っています。

私たちはいつも水のようでありたいと思うんです。商売をやっていれば水よりはコーラを売ったり、お酒にしたり、香水にする方が付加価値は高いんですけど、水は馬鹿にしちゃいけません。長い年月かけながら岩だって変形させていく力を持っているんです。そんな会社を目指しながら、直江津でも皆さんと一緒に汗をかきたい。そんなふうに思っている次第です。

どうもありがとうございました。

2023 / 8・19 ～ 9・10

写真提供
なおえつうみまちアート実行委員会



海の子ども絵画展





祇園囃子で直江津らしいオープニング



お茶碗をつくる

海の世界を描こう





廃材でみんなを笑顔に　遊べる空き地

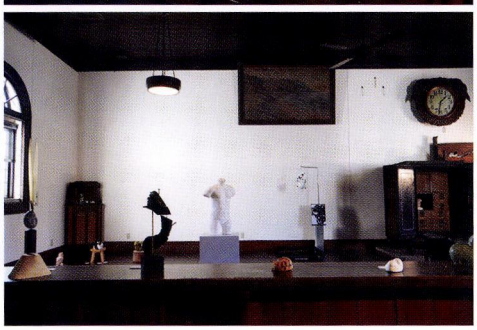


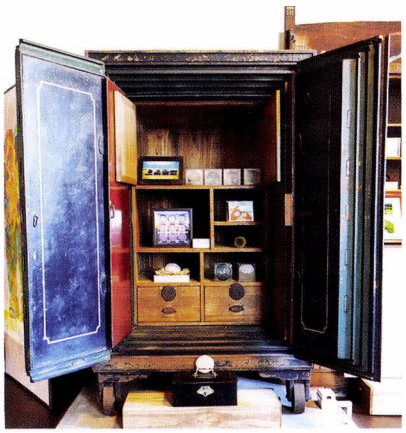
市民が中心　なおえつうみまちアート











ライオン像のある館で
アート



お魚を作ろう

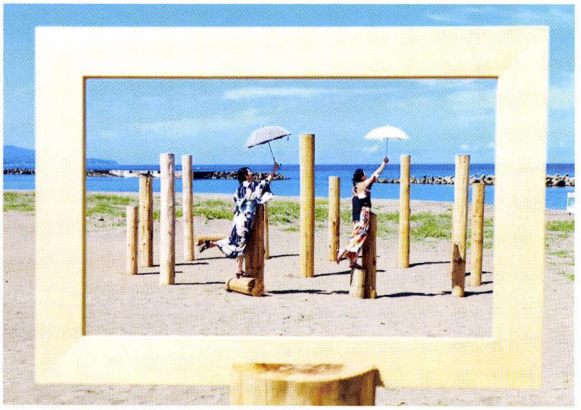




屋台会館の庭をもう一度アート



水平線の記憶





潮風の松林



うみがたりでコンサート

ぶらり直江津さんぽ





スタンプラリー



北前船デジタルスタンプラリー

もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる

なぜ〝御館（おたて）〟なのか

二人の関東管領と越後府中 ―御館・守護所―

小島幸雄

はじめに

去る九月二日、上越観光案内協会の永見完治さんの紹介で関東管領平井城址保存会（会長　松原三友さん）の学習会にお招きを受け、平井城址のある群馬県藤岡市に二人で出かけました。保存会の令和五年度の主な活動は、私たちがご招待を受けた講演会と、一〇月二一日の春日山城跡の見学会ということでした。平井城から春日山城までは当時どれほどの時間を要したのだろうと思いを巡らす時間もなく、「はくたか」は約一時間で高崎駅に滑り込み、昼食を済ませて藤岡市の高崎線の最寄り駅、新町駅に到着しました。

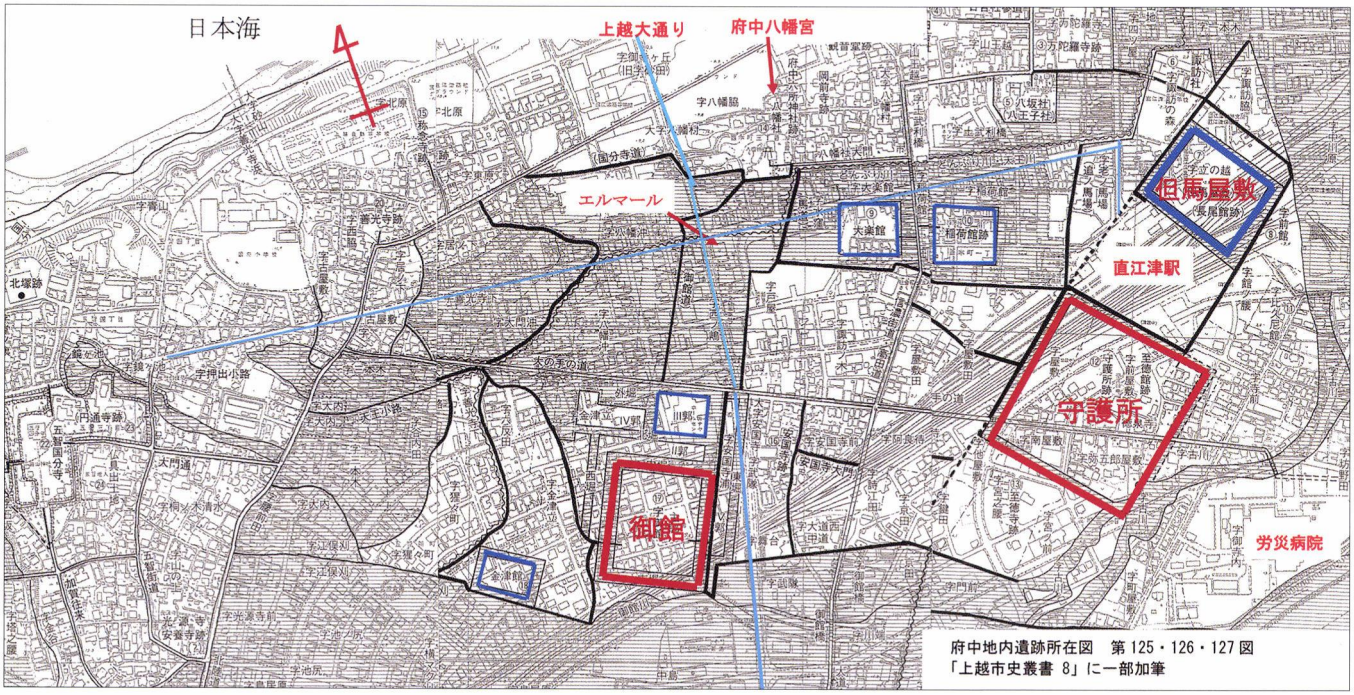
学習会は松原会長の挨拶で開会し、永見さんが招請のお礼と市内五智一丁目の「御館公園」にある関東管領上



関東管領平井城（群馬県藤岡市）



関東管領上杉憲政公顕彰碑
平成 27 年、御館公園に関東管領平井城址保存会によって建立された



府中地内遺跡所在図　第125・126・127図
「上越市史叢書 8」に一部加筆

杉憲政公の碑の経緯を話してから私にマイクを譲って、私は「二人の関東管領と御館の乱」という話題でお話しさせていただきました。

今回は、藤岡市でお話しした時には言及しなかった越後府中の状況を加えて、「御館」とはなんだったかを考えてみようと思います。

なお、最後に本稿の道しるべとなる書籍を挙げてみましたので参考にしていただければと思います。書籍は現在入手可能なものより、古いものであっても議論の出発点になっているようなもののなかから市立図書館にあるものを選びましたので、興味を抱かれた方はぜひ手に取ってみていただければと思います。

守護代長尾氏の台頭と府中の館

藤岡市にお邪魔するに際していくつかの話題を整理してみたのですが、最も気になったのは関東管領山内上杉憲政が平井城を退去して越後に長尾景虎を頼った天文二一年（一五五二）から、景虎が関東管領山内上杉政虎となる永禄四年（一五六一）まで、九年間という年月を要していたことです。

私は、これまでも越後府中に存在が知られる遺跡の消長から答えを探ろうと試みていましたが、確かに発掘調査で知ることができる年代には限界があり、この遺構は天文二一年だとか、この井戸は永禄四年に掘られたものです、などのように暦年代を特定することはできませんが、大まかな年代は表現できると思っています。ただ、火災があったりしてその暦年がはっきりしている場合などはその限りではなく、京都市内の発掘調査ではこの火災の層は応仁の乱です、この火災は戊辰戦争によるも

のと、分かるのだと地層を剥ぎ取った資料を見せていただいたことがあります。

越後府中の館は一辺が二五〇mを超える守護所跡推定地（至徳寺と考えられていた直江津駅とその周辺、以下守護所）、守護所より少し小ぶりな御館（約一五〇mの主郭）と御館と同規模の但馬屋敷（直江津駅とその北側で長尾館と推定されている）と続き、それ以外は一辺が一〇〇m以下（館の大きさはいずれも想定値）のグループになります。守護所が群を抜きますが、御館も周囲の副郭を合わせると守護所に匹敵する大きさです。これらはいずれも市街地にあり、発掘調査が行われたのは御館と守護所の二か所にすぎません。

私は越前国の例を挙げて、下剋上の結果守護代の朝倉氏が守護の地位を得ても府中には入ることができず、一乗谷という都市を築いたことを本誌に書いたことがあります。そこから越後国においても同じと考え、発掘調査が行われた守護所と御館の出土遺物の比較検討から守護所→御館という変遷を想定し、両者の間に権力の移動があったと考えました。言い換えれば、守護所（越後守護上杉氏政権）から御館（山内上杉氏の謙信政権）に権力のシンボルが移ったと考えたのです。

タケとタテ―機能が否定された館と維持された館―

上越市内に所在する遺跡の発掘調査を担当していた私は、中世遺跡の名前に「タテ（館）の内」と「タケ（竹）の内」の二者があることに注目してきました（名前は一例に過ぎない）。以前、本誌でも私の見解を紹介し、「タケ」は御館の乱で機能が否定された景虎側の屋敷であるとしました。これには例外があります。乱の前には景虎側の館で、乱の後に景勝政権を支えるため、そこに配された武将の館は、「タテ」という尊称が使われたようです。「御



発掘された一乗谷　屋敷などが復元されている





上　伝至徳寺跡（守護所）の発掘
下　出土したおびただしい数の唐物天目片（「陶磁器の文化史」より）

館」もその一つと見たらどうでしょうか。

御館が景勝と謙信の跡目を争って景虎が立てこもった館であることに異論をはさむ方はいないでしょう。天正七年（一五七九）に御館の乱が終結して、その御館が破却されたのであれば、それ以降に御館という〝尊称〟で伝承されることはなかったと思われます。

越後府中を代表する中世遺跡の御館は、昭和二九年（一九五四）に合併して直江津市となった五智地区に所在します。五智地区は直江津市街地に隣接して市街化が早く進み、合併一〇年後昭和三九年（一九六四）十二月に区画整理によって第一次発掘調査が行われました。調査は翌四〇年三月・七～八月まで四次に及ぶ調査が続けられ、調査結果は「御館跡緊急発掘調査報告書」として刊行されています。

御館の調査とその調査結果

御館の発掘調査で出土した遺物は多岐にわたりますが、火縄銃の銃弾が出土したこと、簪（かんざし）が出土したことなどが御館の乱の悲劇を一段と複雑化させ拡散させることになったようです。それはともかく、今回は御館の調査成果から造営に関すると思われる事象を抜き出してみます。

御館の発掘調査の指導的立場にあった中沢肇氏の著書「越後福島城史話」に、調査で出土した遺物の特色が列挙されているので引用させていただきます。なお、「上越市史叢書8 考古―中・近世資料―」にも記載があるので併せて参照してください。

一、青磁と白磁が極めて少量なのに、明の後半の染付が非常に多い。

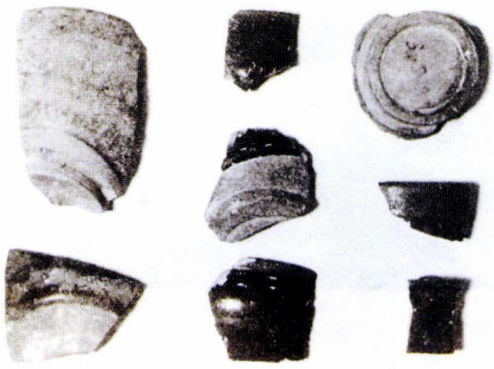
二、中国建盞の天目茶碗に対して瀬戸天目も非常に多い。

三、侘茶を示す高麗茶碗の彫三島が出土した。

四、赤絵も出土し、その中に明末の古赤絵に属するものも認められた。

五、常滑焼の陶片が多く出土したが、どこか常滑と異質な点が感ぜられ、むしろ越前か近隣の中世雑器窯で焼かれたと思われる。





御館跡から出土したおびただしい染付片と天目茶碗片（「越後福島城史話」より）

六、灰釉瀬戸片が多く出土し、中に釉をかけた一種の菊文様を掘ったものも見られた。

七、須恵質陶片のうちに、古い須恵器の破片に灰釉がかけられ、外面が網代紋で内面は青海波紋がつけられたものもあった。この古い須恵器と異質なものも出土したが、この須恵質陶片の産地は不明であるが、きわめて珠洲焼に類似している。

そして、調査を指導された奥田直榮氏が「調査報告書」で、御館を「(前略)それはわが国の天文・永禄・天正にわたる時代、つまり上杉謙信の越後統治時代の全期間にあたる約三〇年間である……」とし、氏は続けて「一部遺物の性格に、慶長三年上杉氏に替って入封した堀氏の御館使用をも一応考慮させるものがあるのは興味深いと思われる……」という一文も引用しています。

なお、「越後福島城史話」に序文を寄せた奥田氏は、彫三島の出土に注目して、「…私共は従来の御館観を改めなければなるまい」、と将来の研究に資する中沢氏の著書に賛辞を記しています。

御館の造営時期

御館の発掘調査から考えられたことは前述の通りですが、その後の中・近世考古学の蓄積は目覚ましく、冒頭の守護所と考えられている遺跡の調査は、至徳寺の位置も含め多くを提示してくれています。ここで築造時期に関する見解のいくつかを昭和に著された文献によって整理してみます。御館の築造時期は大まかに次のようになります。

一、謙信の出生地を御館として、享禄三年(一五三〇)以前の造営とする。

二、越後上杉氏の居館として守護所と考えて一五世紀かそれ以前まで遡るとする。

三、関東管領上杉憲政が謙信を頼ったとする天文二一年(一五五二)とする。

四、関東管領上杉憲政を迎えた弘治年間(一五五五～一五五七)とする。

五、永禄二年(一五五九)頃とする。

一から五は、次の理由から全てが成立することが知られています。一と二は珠洲焼が出土しているので、可能性は否定できません。三・四・五も天文から天正までが最盛期とする出土遺物から、造営時期として問題はありません。

ところで、これらの年代は、文献資料の解釈から提示されたものであり、なかでも「一」の謙信出生地とするのは、明治三三年から刊行された吉田東伍著「大日本地名辞書」にその端を発するようです。越後国府と国分寺研究に大きな影響を与えたのも同書であり、古代越後国府と中世越後府中の位置を直江津としたことから生まれた考え方でした。今回もその影響の大きさにただただ驚くばかりです。「五」は「上杉家御年譜一」に、永禄一年(一五五八)に憲政が謙信を頼ったという記事があって、そこから類推したものと考えられますが、いずれにせよ、このように諸説があるのはいずれも決め手に欠くということなのでしょう。

管領塚と直峰城

晩秋のある日、謙信の父長尾為景によって越後府中を追われ、兄の関東管領上杉顕定を頼って敗走した上杉房能主従が自刃して果てた、十日町市の天水越を訪ねてみ

ました。

春日山城から木田を抜けて国道二五三号に出て、途中から山道に入って牧野峠から望む直峰城は鶴翼の姿といえばよいのか、尾根が左右に延びて中心に実城（みじょう）が聳え立つ姿で、以前から提唱してきた「山城は尾根が命」を絵に描いたような素晴らしい景観の城です。幾度となく訪れている七尾城（謙信が絶賛したと伝わる）を彷彿させる景観です。安塚の町に入り、途中三国街道の説明板を読んで撮影し、熊注意の看板を見ては一人で実城を目指す気力も起きず、西方の牧野峠越しに西頸城の山並みを見て下りました。

そこから引き返さず坊金から虫川に向おうとしましたが、通行止めで引き返し、四〇五号を避けて二五三号から松之山に向かいました。天水越には二五三号から右折して県道に入り、温泉街に入らず直進して四〇五号を走り、松之山温泉スキー場を左に見て天水越の集落に入りました。右折して集落の小道を登ると旧松里小学校に至ると、そこに「管領塚」があり、説明板が立てられています。学校跡の駐車場で眼下の集落を眺めながら弁当を食べ、次の行動をと考えました。

房能主従がどこを通ったかはともかく、府中への近道は現在の四〇五号であり、意を決し車を走らせようとして体育館の冬囲いをしていた作業員の方に道路の情報をお聞きしたところ、「行けると思うけど、熊とシカがいるから気を付けて」というアドバイス。気持ちは四〇五号に行っていたので、とにかく走ることにしました。農作業を終えた山中は人影もなく、四〇五号はドキドキの道でした。しかし、それに優る景観に見入って車を止めた所がありました。安塚区船倉です。船倉付近の峠を走行中、何と府中の海岸線が視界に飛び込んできました。峠を下りた集落には写真の看板が建てられていました。やはり日本海が見えたと確信しました。そこからしばらく走っ



牧野峠から直峰城跡を望む



旧三国峠の説明看板
敷石の道が 2kmにわたって続いている



直峰城跡から牧野峠と頸城の山々を望む

ていてふと気づくと、後ろにパトカーがいるではありませんか、松之山から大島区を通過して安塚区船倉まで対向車二台、人影二人、猫一匹だったのに、突然のパトカーの出現にびくびくして下り、途中で路肩に寄せて先に出ていただき、法定寺を廻って国道二五三号に出て帰路につきました。

御館の名称とその発生について

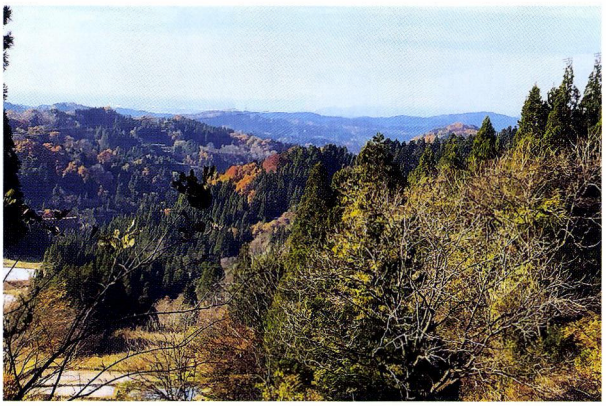
ここで、これまで述べたことをもとに御館の名称とその意味を考えてみます。私は、以前から謙信の政庁として御館が使われてきたと考えてきました。そうでなければ「御館の乱」という名の争乱も起きるわけがなく、景勝が春日山城を占拠し、一方で景虎が御館を占拠して戦うということは、二か所の城、つまり要塞の春日山城と政治と儀式の御館は、越後国内でいずれも謙信のシンボルとして見られていたと考えたのです。

ではなぜ、御館となったのでしょうか。

ここではひとまず憲政の居館といわれていることを抜きにして御館を考えてみようと思います。先にも記したように、高田平野の中世遺跡にあっては、一五世紀と考えられる遺跡の出土品と一六世紀中ごろからの出土品に大きな変化があることが知られています。前に示した写真のように御館では中国製の染付の小片（細かく割れた破片）がたくさん出土していますが、守護所と考えられる遺跡では青磁や唐物の天目茶碗が焼けただれた状態で出土しています。青磁と天目茶碗が主体の遺跡は守護所ばかりでなく、横曽根地区に存在が確認されています。

守護所では「〇〇屋敷」の小字名がありますが、「〇〇館」は無く、横曽根は「竹之内」という小字です。

さて御館ですが、「字御館」と表記され、「頸城文化二七号」に中沢氏は「府内の館址について」を発表され

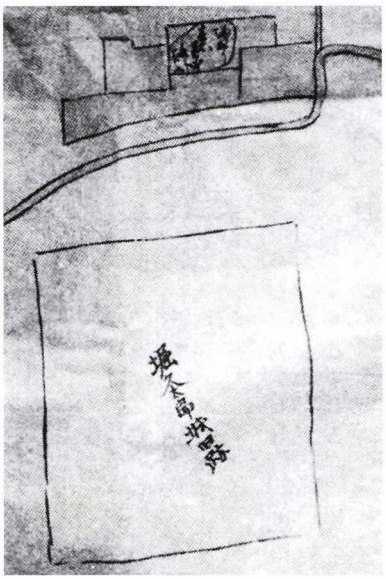




船倉峠から見た日本海と地域をアピールする看板（上越市上船倉）



日本海が見える峠に「小丸山（国府別院）遥拝地」の碑が立つ



慶安６年毘沙門堂知行絵図の御館の位置に「堀久太郎城旧跡」とある（「越後福島城史話」より）

たなかで、御館が府中八幡宮の領地であったことを明らかにし、併せて慶安五年（一六五二）の絵図に「堀久太郎城旧跡」とあることを紹介しています。これは御館です。私が上越に来たばかりの頃、五智地区の更正図を集成した際、四角な土地に入る図が無く往生していたところ、とんでもない地番で放置されている四角い図があって、それをあてはめたら完成した記憶があります。後に、直江津町から春日村に移管された土地だと聞かされました。慶安の図も四角く描かれています。

結論を急ぎます。御館が憲政の平井退去をきっかけにして造営された館であるかはともかく、謙信の関東管領就任と無関係だとは思えないと考えています。多くの染付の小片が謙信の治世の時期と合っていることも確かで、そう考えると景虎が御館を根拠にしたとしても齟齬はないでしょう。そして為景の活躍した時期からは、守護所が使われていないことが出土品からも分かっていることも付け加えると、御館の機能は越後守護上杉家から関東管領上杉謙信への権力の移行を示すと考えるが妥当であると言えます。加えて、御館の乱で景虎（養子の）が御館を根拠にし、そこに憲政もいたとすれば、謙信の政庁を御館とすることが妥当となります。

結びにかえて

九月に藤岡市にお招きただいたことをきっかけに、ずっと気にかかっていた御館の造営と越後府中権力の移動を考えてみました。造営の時期は、結論から言えば享禄以前から永禄まで、出土品からは何ら問題はなさそうです。憲政を迎えて管領館を造営したかは、なかなかむずかしい問題ですが、もう少し御館を考えるため次回は御館を越後国分寺との関係で探ってみたいと思っています。

興味の湧かれた方に読んでいただけたらと思う本を少し挙げました。

「越後福島城史話」　中沢肇　北越出版
「頸城文化」二七号 上越郷土研究会　一九六九
「頸城文化」二八号 上杉謙信特集
上越郷土研究会　一九六九


伝至徳寺跡（守護所）から出土した酒海壺と染付片（「陶磁器の文化史」より）

歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの 伝えておくべきもの

直江津小唄にまつわること

写真は直江津小唄の絵はがきです。

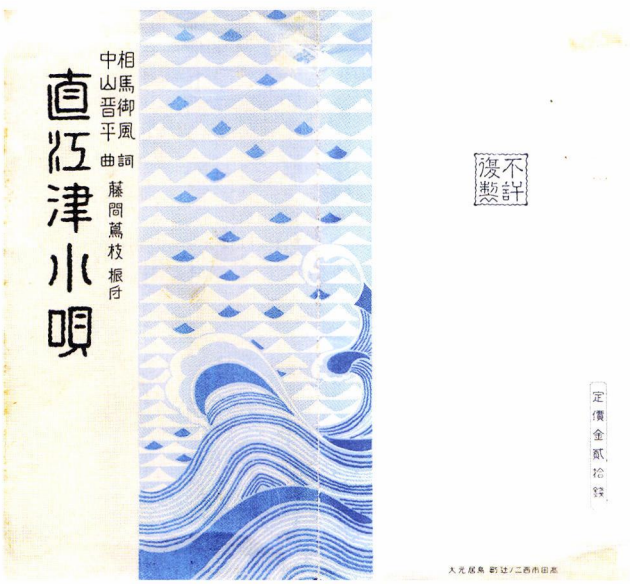
昭和モダンのしゃれたデザインのタトウ紙に歌詞と楽譜、二枚の歌詞カードの絵はがきが入っていました。直江津小唄は七番まであるので、もともと、あと五枚の歌詞カードがあったものと思われます。

直江津小唄は、大正末期に始まった新民謡ブームに乗って、昭和三年、直江津商工会議所会頭高橋喜六の主導で、糸魚川の相馬御風に作詞を依頼しましたが、作曲を直江津の青年会に頼んできました。青年会では作曲も一流の人にしようと中山晋平に依頼し、完成披露会場の段取りまでできていましたが、歌詞を全面的に作り変えることになりました。御風作のもとの歌詞は左のようなものです。（中戸賢亮著「直江津こぼれ話」所収）

一　直江津ァよいとこ　港を見やれ
　　出船入船泊船
　　岡にゃ荷の山　工場の煙
　　沖にゃ見えます　アレサ
　　黄金花咲く佐渡ケ島

二　直江津ァよいとこ見渡す限り
　　瑞穂波うつ広野原
　　汽車の便利と　港のよさも
　　音に聞えたアレサ　音に聞えた
　　これこそ　稼ぎ場所

三　直江津ァよいとこ　男衆を見やれ
　　ひけをとらない浜育ち
　　それにも負けない　女子衆の気質（かたぎ）
　　婿嫁とるなら　アレサ　婿嫁とるなら
　　直江津者をばもらわんせ



四　直江津ァよいとこ　ほのぼの見える
　五智の桜の花咲く頃は
　ほろりほろほろ　アレサ　ほろりほろほろ
　連衆さそうて来やしゃんせ

五　直江津ァよいとこ　潮浴びどころ
　土用の丑の日磯うつ波に
　ちらり浮んだあの夢恋し
　恋しあの夢　アレサ　恋しあの夢
　ちらと見た夢　わしゃ恋し

作曲の都合上、多少改作して曲ができあがり、踊りの手合わせを行ったところすこぶる評判が悪く、御風の了解を得て、当時、直江津きっての文化人が集まり、もとの詞とは全く違う歌詞を作りあげました。

今、私たちが知るところの直江津小唄です。たしかに、元の歌詞のままだったら、今日まで歌い踊りつがれてはこなかった可能性があります。ただ、御風に敬意を表したのでしょう「相馬御風作詞」となっています。

ともあれ、新しくできあがった「直江津小唄」に翌四年二月、再び中山晋平を招いて新たな曲をつけてもらいました。

振り付けは、当時名手とうたわれた藤間静枝（のちの藤陰静樹）にプロ用の組み踊り、弟子の藤間葛枝に大衆向きの輪踊りを依頼ました。

歌詞の改作のいきさつは、「直江津こぼれ話」に詳しく書かれていますが、六月の発表会に招いた歌手について、「〃紅屋の娘〃で名を売った四谷文子」とあるのは佐藤千夜子の著者の思い違いかもしれません。

のちに藤本二三吉の唄でレコードに吹き込まれました。

（YouTubeで聴くことができる）

「明治・大正・昭和　新潟音楽文化資料」は、新潟市の越書房主関徹さんが大病をおして図書館を巡り、県下の新聞記事の縮刷版やマイクロフィルムを渉猟してまとめあげた遺作ですが、それを見ていくと披露会の日時や会場について詳しく知ることができます。（掲載新聞名不詳）

昭和　四年（一九二九）
四月　四日付　直江津北校舎（直江津小学校）で
　直江津小唄発表会
　七日付　直江津小唄できる
　六月一四日付　直江津小唄披露会
　直江津座（第一劇場）
　振付　藤間蔦枝

この直江津小唄に刺激を受けた文芸同人「椙火社」は、民謡の作詞も多く手がける民衆派詩人、白鳥省吾に「直江津音頭」の作詞を依頼し、福田蘭堂が作曲しています。先の「新潟音楽文化資料」によれば、

一〇月六日付、直江津音頭披露音楽会
　直江津波路会本部

で行われており、省吾の年譜には高田・新井の劇場でも行われたとあります。

この時期、波路会を主宰する山川重次郎によって「直江津甚句」が発掘されて話題を呼び、また、白鳥省吾に「直江津木やり唄」の作詞を依頼しています。椙火社の岡田久弥は自ら「春日新田節」を作詞、直江津民謡のＮＨＫ全国放送に出演するなど、地域に民謡ブームを起こしました。

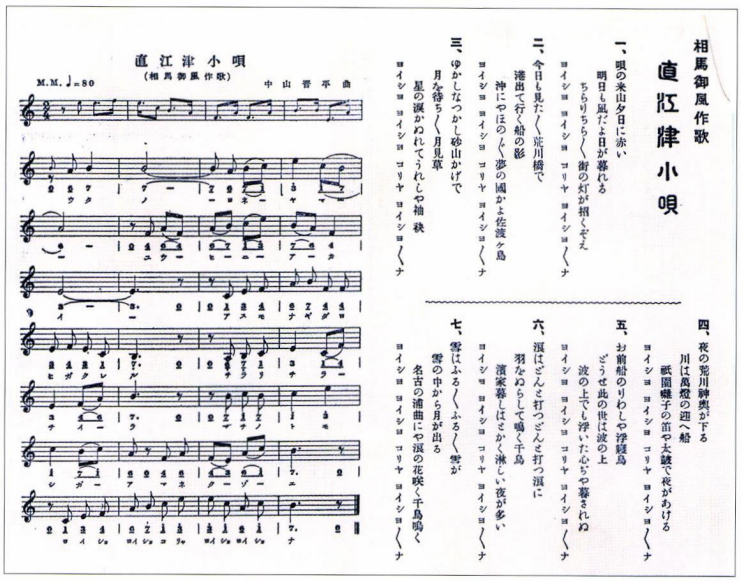
直江津の民謡保存普及に大きく寄与した波路会は、大正一一年、追分節を得意とした山川波路（山川重次郎）が発足させたもので、昭和一年に追分節の研究書ふうの「おしょろ」という冊子を出しています（江差追分の歌い始めにある「オショロ　タカシマ…」から採ったもの）。同書には吟風川合直次など数名の新作追分節も載せられています。

なお、昭和九年刊「直江津商工案内」に、鯛の子の塩辛〈海黄金（うみこがね）〉製造元、山川重次郎商店という広告がありますが、同一人物なのでしょうか。

また、昭和三三年、当時曙区の青年会長であった佐藤新治によって、八坂神社拝殿で祇園囃子が初めて録音された時、その演者の一人に波路がいて、メモには波路会の創設者・若松料理店主とあります（他の演者は星野左官・古川表具）。後にこの音源をもって〝正調〟とされることになりました。

波路会は一〇〇年を経て直江津民謡保存波路会として活動を続け、旧ソ連やオーストリアなどに招かれて歌や踊りを披露して称賛されています。

また、得意とする「直江津船方節」を上越市地域の宝に申請し登録されています。





直江津小唄

作詞　相馬御風
作曲　中山晋平

一、唄の米山　夕日に赤い　日も凪（なぎ）だよ日が暮れる
　ちらりちらちら　街の灯（ともし）が招くぞえ
　ヨイショ　ヨイショ　コリヤ
　ヨイショ　ヨイショ　ナ

二、今日も見た見た荒川橋で　港出て行く船の影
　沖にゃほのぼの夢の国かよ佐渡ヶ島
　ヨイショ　ヨイショ　コリヤ

ヨイショ　ヨイショ　ナ

三、ゆかしなつかし砂山かげで　月を待ち待ち月見草
　星の涙か濡れてうれしや袖挟(そでたもと)
　　ヨイショ　ヨイショ　コリャ
　　ヨイショ　ヨイショ　ナ

四、夜の荒川神輿が下る　川は万灯(まんどう)の迎え船
　祇園囃子の笛や太鼓で夜が明ける
　　ヨイショ　ヨイショ　コリャ
　　ヨイショ　ヨイショ　ナ

五、お前船乗りわしゃ浮寝鳥(うきねどり)　どうせこの世は波の上
　波の上でも浮いた心じゃ暮されぬ
　　ヨイショ　ヨイショ　コリャ
　　ヨイショ　ヨイショ　ナ

六、波はどんと打つどんと打つ波に
　羽をぬらして鳴く千鳥
　浜家(はまや)暮しはとかく淋しい夜が多い



ヨイショ　ヨイショ　コリャ
ヨイショ　ヨイショ　ナ

七、雪は降る降る　降る降る雪が
　雪の中から月が出る
　名古(なご)の浦曲(うらわ)にゃ波の花咲く　千鳥鳴く
　　ヨイショ　ヨイショ　コリャ
　　ヨイショ　ヨイショ　ナ
※うらわ・うらま　湾曲した海岸・入江

参考　「直江津こぼれ話」中戸賢亮
「頸城の人びとの芸能」石田耕吾
「上越市史・通史近代編」上越市
「直江津木やり節」・「春日新田節」歌詞
「上越市史・資料編6」所収
（北越出版・佐藤）

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

近況の社会問題では、「少子高齢化」「人材不足」「後継者不在」「介護問題」等連日話題として取り上げられています。こういった社会問題に向き合うため、ビジネスを通じて、解決に向けて取組んでいる企業が増えてきており、当地域においても「人材不足」が大きな課題として掲げられています。中でも「感じの良い暮らしと社会」を目指すためには、地域の皆様と課題を共有していくことが大切と実感いたしました。

インフルエンザが全国的に猛威を振るっておりますが、地域から頂いた活力を基に、今後も皆様と共に健康に過ごしていければと思います。

（事務局）

目次

上越なおえつ信金倶楽部講演会
感じ良い暮らしと社会　4
市民が中心　なおえつうみまちアート２０２３　16
もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる
なぜ〝御館〟なのか
二人の関東管領と越後府中―御館・守護所―
元上越市学芸員　小島幸雄　19
歴史は「今日」への手紙
直江津小唄にまつわること　27
巻頭エッセイ・わたしの直江津
直江津の冬、お正月の思い出　滝川鯉橋　2

「直江の津」
第二一巻一号　通巻五三号
発行日／令和六年一月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2024・1号

直江の津

発行／令和六年一月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン

頒布価格／五五〇円（税込）